

第三セッション

中国人の歴史意識

問題提起 川勝義雄  
コメント 村松暎  
司会 中嶋嶺雄

す。大体歴史というものは、みなさんの前でこういう意見を話すのもおかしいんですけど、要するに人間の行動なんですから、個人的に取り上げれば必ず論理に結びつく、集団的に取り上げれば必ず政治的に結びつく。ですから、最初から歴史というものを書くといえますか、記録するといえますか、そのときからすでに倫理的あるいは政治的選択というものが、もうすでに行なわれているんで、さらにそれがある時代の、ご都合主義ですか、そういうものによってさらにそれを、つまりもう一べん選択するというんですか、配慮し直すというか、とりあげるといふことになるんじゃないかと思えます。その点、中国の歴史というのは実用的なものが極めて強い。ですから、歴史ばかりじゃないかと思うんですが、前のセッションでもお話が出ましたが、とにかく結果が大事であって、その過程というものは必ずしも問題にならない。こういうことが中国人の考え方ですね。それが非常にキーポイントみたいなものになっているとおっしゃいましたが、全くわたくし、それに同感でございます。つまり代数でやっても算術でやっても同じ結果が出ればそれで用は足りるんだというような考え方がそこにあるんじゃないか。

ですから、そのために、事実というが大変むずかしいことになって、何が事実かということになりますけれども、ごく素朴に、現実的事実を事実として、とにかくとり上げるということ、それは事実そのものとして追求するということ、そのことは非常にうすくなってくるんじゃないか。もしそういうことを仮にやる人間があるとすれば、それは非常に閑人か(笑い)、少なくとも世の中で実際に活動しない隠者かですね。そういう連中が無用なそういう仕事をやるんであって、有用な人間は必ず、大きくいえば天下国家、狭くいえば修身齊家ですね、そういう現実的な活動につながっている。だから、純粹に事実を追求するというようなことは、全くこれは露骨に言えば無用のことである。ですから、わたしは以

前から考えておるんですけども、中国で市民社会というものが少なくとも宋の時代あたりから成立いたしました。少なくとも経済的には大きな力を持っているにもかかわらず、その近代のヨーロッパ的なサイエンスというようなものは、中国においては実際には全然起こらない。だから、技術的な面のことはいろいろ発明もあり、進歩もあるのですが、それは科学として組織的に組み立てられるようにはならない。これが、つまり結局中国人の実用的、実用性というのが非常に出すぎている、それに原因するんじゃないか。これは、わたしのまことに軽薄な考え方ですけど、いまちょっと考えましたので……。

中嶋 どうもありがとうございます。非常にユニークな重要な問題提起であったと思います。まだ議論が尽きないわけでございますけれど、どうも司会の不手際もありまして、もうそろそろこのセッションを終わらなければならなくなりました。歴史意識の問題についていろいろ議論が進み、多くのことをわたし自身も学ばせていただきましたけれども、最後に大きな問題としては、角田さんから出されたいわば文化世界としての中国人の自己完結性というようなものが、今後の世界の中でどういう意味を持っているのかという問題が、まだ残されているように思うわけでございます。この問題は、実はわれわれ自身にとっても今後追求しなければいけない問題なのだと思います。

最後に司会者として、いまの問題をふくめてひと言だけまとめたい、まとめというが大変僭越でございますけれども、問題のしめくりをさせていただきますと、文化世界としての完結性というような問題では、たとえば中国にキリスト教がはいって来たときの中国の反応と、日本の反応とのあいだには、同じ東洋でも非常に違いがあったと思うわけでございます。ご承知のように、一六世紀中葉以降、マテオリッチのイエズス会の中国普及が進むわけですけど、その前にザビエルは日本に來まして布教に努め、キリスト教が日本においては、ある意味で、事実を事実として認識する日本人の歴史意識の中

に、一種の論理性として受け入れられていくプロセスがあったように思うわけですが、中国の場合、当初、キリスト教の布教が非常に困難だったわけであり、ザビエル自身も中国に布教しようと思っただけ、それが果たせずにマカオの近くの小島で歿するわけですが、そのあとで、マテオリッチが行ったときには、ザビエルが日本に布教した時と比べて、中国では一種の普遍主義の壁にぶつかってしまいうわけですね。こういうことを考えてみますと、やっぱりいまの中華思想といったようなものではない、多くの関連があるように思うのです。それからずうっと近代にきまして、マルクス主義が、あるいはマルクス・レーニン主義が現在の中国共産党にはいつていったプロセス、そしてそれを現在の中国共産党なり、毛沢東思想なりがどう受けとめているかということも考えましても、まさに同じようなことがいえる。つまり本質的にはそれはほとんど受け入れられていない。つまり、マルクス主義をも含めてそれ以上のものが中国にはすでにあるという意識、今日の毛沢東思想こそ世界を照らすというあの意識につながるものがあるような気がいたします。

そこで、わたしは最近つくづく考えるわけですが、戦争以来、ヨーロッパの近代というものが中国大陸に上陸していく。やがて日本もそれに加わっていくわけですが、そういう場合の中国にかんするこれまでの歴史観というものは、いわばヨーロッパ近代のために中国自身が侵蝕され、犠牲にされたという、そしてそのために中国のいわば混乱があり、停滞があったという、罪悪の原罪を、根源を、つまり近代のほうにおおいかぶせる、あるいは日本のほうにおおいかぶせるという問題の立て方、そういう考え方がまさに一般的です、われわれ自身もそういうふうにいまままで考えてきたわけですが、どうもそういう見方自身を根本的に再検討してみる必要があるのではないか。つまり、近代中国の悲惨の根源は、近代西欧や日本の中国への侵蝕にあったという点のみならず、中国自身の側に普遍主義の王座が

あって、そこに安んじて中華思想にとらわれていたことにその根本的な根源があったのではないかと、いう問題ですが、こういう観点を一べん日本人は中国にお返ししてみる必要があるんじゃないかと思うんですね。そのお返しがほとんどなされていまま、実は今回も日中国交回復に至るまで、そういう状況の中で日中間の対話があったのですが、それは、ある意味で擬似的な対話でしかないのではないかと、どうもわたしは、そんなことを考えはじめております。こういうことをいうと大変叱られるかもしれませんが、そんなことさえも感ずるわけでございます。

ある意味でそういう中国文明の自己完結性というものに対する中国人の自信と、それに居なおっているという状況、これは、やっぱり驚くべきものでありまして、非常に卑近な例を申し上げますと、中華人民共和国はすでに約一〇〇近い国と国交を結んでいるわけですが、その相手の一〇〇カ国に対して、中国自身が相手の国に出かけて行って国交を結んだということは一度もないわけですね。一種の朝貢外交ですね。これは、たしかに中国の政治が不安定で指導者が外へ出かけられないという現実的な要素もあったかも知れませんが、やっぱりそこにはいまいったような問題がどこかにあるような気がいたします。いわば中国にとって伝統的なそのような対応自身が、中国の近代化にとってどういう意味を持っていたのかということも考えますと、日中関係なんかでも、われわれだけが頭を下げていけばいいということでは、この問題に対する説明は非常に皮相なものに終わってしまうんじゃないかという気がいたします。以上、わたし自身の非常に乱暴な意見でお叱りを受けるかも知れませんが、一つのまともなとして、このセッションを終わりたいと思っております。どうもありがとうございました(拍手)。

東西文化比較研究

# 歴史像の東西

日本文化会議 編 / 研究社